

ネパールの子供たちとライオンズクラブ

ネパールの児童教育のための20年・パネル展
と
留学生支援のための絵画三人展



NPO法人 福岡・ネパール児童教育振興会



ライオンズクラブ国際協会 福岡博多東ライオンズクラブ

ご挨拶

私たちは、クラブ創立三十周年の記念事業として、ネパールに小学校を建てることを決め、実行しました。

建物のみを建てて寄付することは、一ライオンズクラブでも可能です。しかし、これでは責任を取ったことにはなりません。その運営についてもフォローしなければ、やがて学校は放置され、荒廃してしまった例は沢山あるようです。

私たちは、このことを理解して、運営についても十年間は責任を持つこと。その間に村は自立を図り、以後の学校の経営に責任を持つこと。村の自立については、私たちも全面協力すること。以上の約束を村の長老たちと交わし、スタートしました。

そのために私たちは、「ネパール児童教育振興会」を設立し、他のライオンズクラブの協力を求め、広く市民のご支援を呼びかけました。このことによって、私たちはネパールの子供たちと深くかかわることが出来るようになりました。

さて、この子たちを小学校卒業で放り出すことが出来るでしょうか。彼らにとって、以後の教育を受ける機会は永久に失なわれるのです。私たちは、せめて中学校まで、更には二年間の高等部のクラスまで学校を広げざるを得ませんでした。

次に私たちは、ニルマルポカリ村の振興に深く関与することになりました。

ネパールの農村は全くの自給自足の生活で、村にはゴミ一つありません。ゴミになるようなものは何一つ無いからです。また、年寄りと子供の姿しかなく、若者は出稼ぎに出て、その仕送りで生活を支える状態です。

子供の教育環境は劣悪で、畑仕事や薪拾い、子守りや家の手伝いで学校に行けないし、行きたくても学校が近くに無いといった状態です。恐らく、農村部における大人も含めた識字率は三割に満たないと思われれます。

政治の停滞と混乱によるものと断言してはばかりませんが、そのためにこそ教育に力を注いで賢い国民をつくらねばなりません。まさに「ネパール児童教育振興会」設立の目的

です。会長の篠隈光彦は何度もネパールに足を運び、その数は六十回に及ぼうとしています。全てについて彼の働きに負うところ大だったのです。

どうしたら村を、ひいてはネパールを豊かにすることが出来るか。何か輸出できる農産物を作るしかない、というのが私たちの結論でした。

色々と模索した結果、コーヒー豆だったら日持ちするし、比較的栽培も難しくなく、しかも世界の需要は伸びている。コーヒーを村の産業として育てよう。一からのスタートでした。現在一三年目です。コーヒーの収穫と日本への出荷は、徐々に軌道に乗りつつあります。

今後も様々な課題が横たわっていると思いますが、私たちは「ネパール児童教育振興会」を中心に取り組みを続けていきたいと考えております。どうか引き続きのご理解、ご支援をよろしくお願い致します。

二〇一七年四月

ネパール児童教育振興会

福岡博多東ライオンズクラブ五〇周年実行委員会

ネパール児童教育支援のあゆみ

1997年

6月 福岡博多東ライオンズクラブ（以下博多東LC）の創立30周年を来期に控え、その記念事業として、ネパールにおける小学校建設について、人道支援の見地から検討を始める。

福岡留学生会との協議の結果、最も教育環境の劣悪な状態におかれている国としてネパールが挙げられた。

7月

クラブ会員である山崎広太郎がネパールの駐日大使ケダル・マテマ氏と東京の大使館で面談、ネパール在住のダルマ・アディカリ氏等の紹介を受ける。

8月

山崎広太郎はネパール人留学生シャレスト・スボダ君の同行のもとに、ネパール各地を訪問、最終的に前述のダルマ氏や現地のカンダキライオンズクラブとの協議の結果、ポカラ市郊外のニルマルポカリ村に候補地を絞る。

ニルマルポカリ村を訪ね、村長のカマル・モハン・ポウデル氏をはじめ村の長老や女性たちと懇談し、村の将来と生活の向上のためには子供の教育が最重要であり、学校建設について強い要望を受ける。

ニルマルポカリ村を候補地として持ち帰り、その具体化に向けて協議を重ねた。この間ネパールに支店を持つ住友商事に現地交渉の窓口になっていただき、ネパールで事業を行っている大林組に設計や監督について全面的な協力をいただくことになったことは、実現に向けて大きな一歩であった。

12月

博多東LCの30周年事業として正式決定する。

同時に福岡ネパール児童教育振興会（以下ネパール振興会）会長篠隈光彦を発足する。以後「ネパールの子供に教育の灯を」の理念の下に篠隈会長の奮闘が始まる。因みに篠隈会長のネパール訪問は今日まで60回を越す。

1998年

1月

博多東LC会長中島祥光他役員によるネパール訪問。関係者間の合意成立。施設は小学校とし、教室と職員室をあわせて6室の平屋建てとする。また支援期間は10年を限りとし、その間に村の自立を図り、以後は村の経営に移行することを柱とする合意である。

このときのメンバー山崎広太郎により小学校の完成予想図を絵画化し、以降のシンボルとした。





5月 住友商事の仲介により現地の建設会社ビラウタ社と工事契約。起工式はネパール振興会の代理として住友商事の吉開氏に出席していただく。



6月 ネパール振興会は機関誌「ネオパール」を創刊する。

建物の建設に至るまでの経過



学校用地は村所有の土地と周辺6名の個人所有の土地が無償提供された。村は高い山々の両斜面に畑と民家が点在するという形であるが、学校用地はその頂の稜線にあって、アンナプルナの山並みを望む一等地である。しかし村には人道しかなく、仮設の取り付け道路をつくるにも、村人の汗と人力によるものであった。また建設に関連する様々な協力や校舎周辺の整備についても村人は率先して行った。

1999年 1月 建設の工事完了



完成検査を済ませ、建設会社ビラウタ社より引き渡しを受けた上で、博多東LC中島会長よりカマル村長に対して、建物の贈呈がなされた。学校名は「福岡ニルマルポカリ小学校」に決定。同時にカマル村長を会長とする学校運営委員会（SMC）が立ち上げられた。

7月 ニルマルポカリ小学校が開校。

ネパールの新年度が7月のためである。小学校は5年制であるが、学力に応じて幼稚園クラス30名、1年生クラス34名、2年生クラス31名、3年生クラス22名で合計117名の新生徒である。職員は校長他6名である。



10月 開校祝賀式典の開催

福岡からクラブ会員や市民の参加も得て、総勢47名が出席。前年福岡市長となった山崎広太郎も晴れの参加となった。



2000年 6月

保護者会の開催

毎月実施することにし、1回目は30名程度であったが、2回目は120名の出席があり、家庭の中の教育に関する意識の向上がみられる。



各方面からの支援

ここでネパールにおける学校建設および運営に対して、各ライオンズクラブをはじめ多くの団体や個人の方々から多大のご支援をいただいたので、その主なものを記しておきたい。

◎ライオンズクラブ国際協会

博多東LC、福岡那の香ライオンズクラブおよびガンダキライオンズクラブ共同による国際人道支援事業として、ライオンズクラブ国際協会LCIFより1万ドルの交付を受ける。

◎ネパール振興会会員の市民有志1700名の会費支援

◎福岡市私立幼稚園連盟

ネパール振興会に対して、ネパールの児童教育支援金として募金が行われ、8年間に亘って総額1千万円の浄財が寄付された。

◎「桂文珍」チャリティ独演会

ベイシティ21ライオンズクラブとの共催で、7回にわたって行なわれ、事業資金の獲得に貢献した。

◎福岡ふようライオンズクラブと甘木（現朝倉）ライオンズクラブが校舎増築資金提供

◎福岡鶴城ライオンズクラブ30周年事業として図書館の建設寄贈

2000年
11月

開校1周年記念式典の開催

福岡から27名の出席のもと行われた。校門からの道の両側に子供たちが並び、手作りの小さな花束を競って私たちに渡す姿に、大いに感激する。

しかし、開校時117名の入学生のうち47名が留年するという事態に直面し、学校は二の次という親がまだ多いということを実感する。次年度からは「学校に行こう」をスローガンに、出席率の向上を第一目標とすることとした。その後は圧倒的に改善され、成績も上がり、留年生もいなくなった。



2001年 1月 校舍増築工事に着手



生徒の進級とともに必然的に教室が不足する。更に根本的な問題であるが、小学校のみにとどめるかどうかで大いに悩むこととなった。取りあえず隣接の土地に一階部分のみの4教室の増築を決定する。

村人たちはこぞって、この学校への愛着を深め、その重要性を強く認識し、合わせてライオンズクラブの活動への信頼を高めて、さらなる上級クラスの設置を強く要望することになった。しかし、ライオンズクラブの能力としてはこれが限界ではなからうか。

これ以後は、「ネパールの子供に教育の灯を」を掲げ、多くのライオンズクラブや団体・個人の協力を引き出してきたネパール振興会とその会長である篠隈光彦の熱意に負うところが大きであった。

5月 福岡にネパール名誉領事館開設。初代名誉領事に篠隈光彦ネパール振興会会長が就任。



2002年 2月 福岡ネパール児童教育振興会がNPO法人に認定され、理事長に篠隈光彦が就任。

4月 福岡ニルマルポカリ小学校に図書館完成。

福岡鶴城ライオンズクラブは創立30周年記念事業として図書館を建設し寄贈された。「虹の図書館」と命名。



8月 第一期卒業生30名を送り出す。

ネパールの小学校は5年生までである。これでお別れかと思うと心が痛む。

この時の卒業生の一人であるアショク・ポウデル君が(2017年現在)留学生として福岡で学んでいる。些少だが、新設の奨学制度により奨学金を交付する。

No.25	①名 前	アショク・ポウデル
	②年 齢	12才
	③家 族	6名
	④卒業校	地元の中学進学希望
	⑤将来の夢	教師
	⑥通学時間	1時間以上
⑦その他	欠席 2日、学校はとても楽しい、できれば12年生までやってほしい。(父:専業主夫、日雇労働、進学は無理)	

12月 中学の部、高校の部増設を決定。

かねてからの懸案であり、留保してきた中学(6年生と8年生)、高校(9年生と10年生)の増設について、現地学校運営委員会(SMC)と協議を重ねた結果、広い視野を持つ人材の育成がネパールの将来のために不可欠であるとの合意のもとに、大きな決断を下すに至った。



2003年
4月

中学の部、6年生クラスのスタート。
この年からネパールの教育制度は4月を新学期とすることになる。
学校名も「福岡ニルマルポカリ学校」に変更する。

もう一つの課題（ニルマルポカリ村の村おこし）

自給自足の村人にとって、やがて立ち向かわねばならない学校の自主運営は大きな課題である。当初の約束通り10年を経れば原則的に学校は自分たちの手で経営していかなければならない。現在の村には現金に結びつく特産品もないし、その方途も見つからない状態である。村と村人に現金収入の道を見つければ、いわゆる村おこしをどう行うか。
私たちも様々な検討を行ってきた。港から遠いネパールでは、輸出できる農産物の種類も限られている。サフランの栽培、そばの栽培、養鶏、養豚、そして行き着いたのがコーヒーの生産であった。

2003年
6月



新しい産業としてのコーヒー栽培に着手。
いばらの道、だが希望へつながる道を歩みはじめる。

コーヒーの苗木一本につき5ルピー（日本円で8円）を農民自身が負担し、205世帯が参加、6000本の苗木を植えた。収穫まで4〜5年を要する。しかし一年後、その半数は枯れ果てた。
生産者による「コーヒー開発委員会」を立ち上げ、意識の向上を図る。

コーヒー事業の立ち上げに多大な貢献を行った人物としてサガル・ラージュ・シャルマ氏の名前を挙げなければならない。彼は留学生として長年福岡に居住し、福岡に多くの友人を持っている。現在はカトマンズ大学の助教授として活躍されている。私たちの学校建設と運営についても、当初から助言と協力を惜しまなかった人物で、ネパール振興会の理事もつとめていただいている。
その彼が、ニルマルポカリ村のコーヒー栽培について、ネパールの新しい産業のモデルになると注目し、ネパールと福岡との架け橋として全面的な協力をいただいている。



2004年 8月

シャルマ氏により用意された他のコーヒー栽培地の視察チームの農民から戸惑いや不満の声が上がっていることを受け、コーヒー開発委員会とのミーティングを実施。

コーヒー栽培に対する村人の不安は、当然のことながら「コーヒー栽培に必要な知識が無い」ということで、2003年に植えた6000本のうち半分しか残っていない点については、その理由として「穴掘りや肥料づくりの指導がなかった」、「シェードツリー（日陰をつくる木）がなかった」、「現地の専門家の指導が不十分だった」というもので、日本側に対して技術指導の要請があった。

2005年 1月



コーヒープロジェクトに対して日本からキョーワズ珈琲の一刈吉房氏とボルカフェの角谷智氏にネパールを訪問していただく。一連の村内の視察後、両氏から標高1000米のこの地はコーヒーの栽培環境に最適であり、高品質のコーヒーが収穫される可能性が高いとの評価をいただき、その上に生産品の買い取りについても約束を得た。

8月



独立行政法人国際協力機構（JICA）が草の根技術協力事業として採択。事業名「カスキ郡ニルマルポカリ村コーヒー栽培による農業開発計画」、期間3年、事業規模1000万円、貯水タンク4か所、共同作業所などのインフラ整備であるが、これにより村人の生産意識の向上が期待できる。栽培農家は375世帯まで拡大した。

11月



福岡ニルマルポカリ学校の学校運営委員会（SMC）のメンバーの福岡訪問。カマル会長、バグラム校長、長老のドルバ氏、タンカ氏の4名である。福岡市長山崎広太郎への表敬訪問。福岡市立横手小学校の視察。大分県の大山村「一村一品運動」の見学である。



2006年
4月

ニルマルポカリ村産コーヒーの初出荷。
150キロのコーヒー豆が初めて福岡に輸入された。キョーワズ珈琲社の一刈氏の手により商品化されたもので、商品名は「ヒマラヤンアラビカ」、「一杯のコーヒーがネパールの子供の笑顔に」をキャッチフレーズに博多大丸、井筒屋デパートなどの店頭に並んだ。

2007年
1月

JETRO（日本貿易振興機構）主催の開発途上国の地域活性化策としてニルマルポカリ村のコーヒーが採択され、「ヒマラヤンアラビカ」がネパールの一村一品として成田、羽田、中部国際、関西、福岡の各空港ロビーに展示された。



5月

三階建ての新校舎が落成
博多東クラブ、那の香クラブはもとより、多くのライオンズクラブの協力があり、そして福岡市市立幼稚園連盟をはじめ多くの団体、市民有志のご協力を得て小学校の寄贈に始まった事業は、幼稚園を含む中学・高校まで学べる見事な三階建の校舎となった。このときネパール振興会はNHKプラネットの協力を得てドキュメンタリーを制作した。そのタイトルを「ネパールの光と夢」とした。

2008年
4月



福岡ニルマルポカリ学校開校10周年記念式典を開催。
開校から10年目に当たる今年、主体はSMC（学校運営委員会）に移っていかなくてはならない。その一年である。
式典は福岡から30名の参加。元駐日大使ケダル・マテマ氏を来賓に迎え、厳粛に執り行われた。

7月 北九州小文字ライオンズクラブ結成35周年記念式典の記念品として「ヒマラヤンアラビカ」を配布、合わせてネパール振興会に100万円の寄付。

10月 出光興産はコーヒー栽培事業への支援金として年間100万円を5年間支給することを決定。

2009年

6月

奨学金の支援制度開始
10年間の支援期間の終了後の対策として、授業料が払えない生徒を対象に、年間で30万円を5年間に限り支援することにした。

2013年

5月

「福岡ネパール児童教育基金」創設
5年間の奨学金支援制度の終了をうけ、教育基金を立ち上げる。
第一次基金としてネパール振興会より250万円を拠出する。



2014年

1月

第二次ICA事業がスタート。
事業名「ニルマルポカリ村コーヒー農家自立育成計画」でコーヒー農家280世帯をベースに「コーヒー農業協同組合」を設立し、生産者が自主的に、自立的に生産活動を行うことを目的とする。
生産目標、5年後10トン（グリーンビーンで）



11月

任期を終えた篠隈名誉領事に代わって、新たに就任された津上賢治氏とともにネパールを訪問。学校創立15周年記念式典への参加も兼ねている。
津上氏は国連ハビタットの役員もされており、途上国の問題に詳しく、学校やコーヒー農園を興味深く見て回られた。氏は現在福岡空港ビルディングの社長として多忙である。



記念式典はシャングリラホテルの中庭のホールにて、卒業生100名以上の参加のもと、ポカラのガンダクライオンズクラブもお招きして盛大かつ和やかに行われた。

「福岡ニルマルポカリ学校職員年金基金」の創設。

質の高い職員を確保するためにも、第一次年金基金として50万円をネパール振興会の拠出により積み立てる。以後、松浦潔様、阪本浩生様、緒方久喜様、小坂美佐子様など有志の方々の寄付金が基金に組み込まれている。

2015年
4月



「コーヒー農業協同組合」の視察
組合設立の目的は、組合員が組織的にかつ自主的に栽培技術を高め、合理的に農園の管理を行い、有効な収穫につながるネットワークを形成することである。組合の活動如何がコーヒー栽培の成否を決めるものである。
また重要なことは、第二次 JICA プロジェクトで導入した脱穀機等による製品化である。組合員がグリーンベーンにするまでの工程をマスターして、付加価値の高い商品として、直接海外に輸出できるようにすることである。生産量の目標を10トン、更には30トンまでもっていききたい。
今年2トンの製品化を達成した。

「ネパール大地震」の発生

2015年4月25日、マグニチュード7.8の大きな地震がネパールを襲った。死者9200人、建物の被害は甚大で、カトマンズ盆地の世界遺産にも大きな被害が生じた。日干しレンガを積んだだけの建物の多いネパールでは、被害はより大きくなった。カトマンズ盆地の西北部に位置するニルマリポカリ村周辺は、壊滅的被害は免れたものの、福岡ニルマルポカリ学校も建物の亀裂や、外回りに被害が出て、構造的に問題はないか心配された。生徒やその家族も不安に包まれていた。

2015年
6月



ネパール振興会に対し、多方面から自発的な募金活動により集められた浄財が寄せられた。

大別するとライオンズクラブ関係、一般の法人・個人、それと理事長の出身校の同窓会である福商会であった。皆さまのご理解とご厚情に感謝いたします。

7月



被害状況の視察。

学校の被災状況の確認と復旧のために、今回も大林組（株）の全面協力を仰ぎ、構造設計担当の伊藤部長、かつての留学生で現在大林組の施工管理技術者として活躍しているシャレスト・スボダ氏、博多東LCの会員で一級建築士の一色美昭が現地に飛んでいただいた。建物の被害確認と適切な対応策が協議され、即座に改修のための指示が現地の建設会社になされた。

11月



改修完了の確認のための視察。

改修工事で特記すべきは、日本からの三人の技術者の指導により、それぞれの部位に鉄筋が入られたことであり、万全の修復であった。これで子供たちは、安心して授業が受けられることになった。

2016年

6月

第99回ライオンズクラブ国際大会が福岡で開催され、世界から35000人の参加者のもと大成功を博した。

開催ホスト委員長不老安正氏の決断により、ネパールコーヒーが、日本のライオンズクラブの協力の成果として大会の記念品の一つとして採用された。



10月

福岡ニルマルポカリ学校の卒業生ディル・マヤさんが留学生として福岡のアジア日本語学院に入学した。



ネパール振興会は、理事である山崎広太郎の呼びかけで「福岡ニルマルポカリ学校」の卒業生の福岡への留学の受け皿として、「留学生支援奨学基金制度」を創設した。マヤさんはその第一号である。

11月

毎年恒例となった市民参加の視察訪問団が、今年もネパールを訪問した。

二〇一七年四月

福岡博多東ライオンズクラブ五十周年式典

実行委員長 山崎 広太郎